婦人孝經

江戸花誌

後篇

元亨

番號 174
冊數 八
京華石河光治藏

へ13
2916
5

へ13
2916
5
特

昭和九年
七月六日
購求

江戸花誌後編序

公羊傳曰ク人ノ讐ヲ報ズ
ルンバ子ホ有ル後ニ爲ル
江戸花誌と題する小冊あり
前編四卷已に出版あるを
いとゞも半金ノ稿を完

今亦後編四巻を著して
其の書尾を補の所謂
數蹟の海を防ぐ味人み
知らずのみ何ぞ敢て
屈を測らんやまたくも
素姓の若き疑府の
嘲あざみ殘のこる義を
知らずとて
文政九丙戌の
正月

里山人

後編四季目録

○夏のはじめ　江戸むらさきの日の出より
大きなる蓮の花咲さかる
○夏のなかば　江戸むらさきの垂髪いとうら
菖蒲　ようまづ紙ゲ家い蒼色ぞと
○秋のはじめ　柏餅よくかうしてぞ舌新
苦とあるく萩の枝畫くあの俤ぐら
○秋のなかば　妙ゆ未字かく風の弓かく
揺をもとへ　くまもとあとへ
冬ふ絵文の六ツのおびら

婦人孝経　江戸ノ花誌　後編

藏書之記　いちかわ　みつそう

夏のはじめ

併る業の因縁を深く現世の果報と示し
亦現世の悪業をいまゝ未来の苦患を
悟らしむるが人情の本ゝ法後の
なりふ繁らされて枝のばら〻花咲る嫁ち
とへあるまてうろ春ふのとこ家の長湯中ある

花笠一学ぐ娘おとうとあ新松孔の後家
絶ふおのびて叔父の続きする業系雷女方へ
りくれて月池の後炮町ふやき月日を
くれば且者あ親のそるる紀宮朔を教きま
梅木香門ぐ逸逢の行林をぐくもぐく哭あ
あ死者しとぐ人ふ命ひの指しまりを雷女夫
姐五子のでくふか抱しそカノ白結豆の塀ふ白
義ぐまぐあんの四者ぐう信人の奔徒ぐらあて

おとうぐ持症の河ひ桜ふ平金ってりとの元
手ふ知うくれば雷女　夫婦ぐよろとびいのぐも
あぐ足偏くふ塀ふ白屋ぐ差ありとく武日
雷女おとうを月乃て白結豆の塀完ふ桜のもき
影と業用まれぐ白義さろとく出向ひてまぐく
ちちと垂月へ体のひ茶相系盃の結ふ文あて
後雷女白公義ふむうひ先のつくその后ハ結豆
私用ふ元給豆ふ元ぶん元ぐう五ゆ塀ハ元免下

さるべく佛さうそくあるべき日れいナあるべきこと
おとうるの日差をもつて爲きまらくとうろ
よく今いまや平生の通ふ相あり備へ不日無
御ゆとい斗り大怪不存ずるあり〳〵日れ
ある事るべき筆のおれ物ニやうやの所ふ存ふまけ
大きふ事ふ中沢ふ合せ今日八淺
草新町まる〳〵楽が病気中後の日れ事ふ後
そ日又食されを通り無り序でまぐらトナるめ

あまり奇何ふれども下すお礼ふ事りナクト叮
寧ふいい入無ふれがおとうも金新して日差迄
わと長坂ふ少あふ礼をいへ白分少てユニハ
日叮寧ふるおとを少そて却て痛〳〵入りゆあり
佛をまふ引うへ悴殊ふ命るの怪らく相後し
ナさ〳〵ぬるタハ下しわまうて相老がふまひ
出事ふ〳〵ふされといふふ付く先頃縁組のる
いひあれ〳〵接拶をもせ〳〵却のひ〳〵ガイヤ〳〵

なる中ふかうの中にて結句。まのぞくのあるひを
せんとうハとさ〳〵ねさらいのめ出さず品まれく〳〵
毒の毒ゑ万〳〵ゝ〳〵ゝ配あるべ〳〵ちていう
ゑうあるに病体ふゆやとゝいろるふ白ゑ義因ふ
一ちろの涙をうくゝお尊稼のうくゝ仏ゑうを包を
ゆべ〳〵殺が高ゑのの宮仏をゆもされをさ
高ゆあきゆあるうう一ト通ゑ世ゆめちされ先葉て
和歌人をのうちおうさゑのるゆをゆ入し

しもせぐれ銀十弟義いうある宿世のゆえんゆう
牧ふのゆ〳〵ひゆ長管仏ひ悩やるゑ〳〵ふゆるう
子を抱ゆふ歌ゑふ仮ふぞゑ〳〵俳義あゑ〳〵ゆ根
徒のるゆゆ〳〵和外ふゆ人ゆまあるゆ多れべ
縁組のるゆ抱ゆひゆ毒ゑずゑのゆ形りゑの子
細ハ存じちらねど新ゆ世ゆまあるうくうう毒
ゆうて中ゆすぐゆ仮ゆるゆくうちるゑ〳〵ゆう
ある因縁のまうゆ〳〵ゆ銀十弟ゆるゆ郎角ゆ

おとうさまのうち居れうとして居るうよりいと
おもひつゞみ給ふ為ひとうとく今は居ト乃
のうちに閉籠りて人に逢さくきむづかしく
暮らしトのの扨ひの旅人さま〳〵の行衛
まゞなる醫療自然ある方あるれど門に出ず人
ある為に来れば七指をくきとも笑くを那て
日数もすぎぬれば終あり命も拾らんと思ひ
ふ投き考る方なき無那なるき一人の

せがれまき〳〵兄殺しふまるんのうち古推察
あれトだんりまて紙了巻自分れしト涙とも
流りられば費やもちのんを惜しうどもおとう
ぶん居さられず独よ大事ある身あれば
さたなら之べおとうを銀子弟が切るんぶー
命も絶ちんりどふ扨のひ旅ふよーをきらく
まゞ初恋のむすめんあもうまーと扨りども
ものこまあるるあれば心ぶりふれいあて和ひさ

いらく〳〵せで御勝向く〳〵落られが爾妖もまの
毒なのぐらいきのの御性〳〵をうみのつり信ゐ〳〵
鶯るきのうりゆるうおとうぐ毒まへ出差やく
か彼仕り銀十帛ぐのへおとうゆ〳〵の出毒をと
あれぐ毒とと能出器ぐ〳〵のれといひ又御性〳〵
のうちゐも思案了管せよしとのお毒せまの
増果〳〵ゐおゐのうち酒ぐ管ふ〳〵へうれどゐ
仰ぎをキスゐ大事ある柴ぐ多のうく〳〵ぐうふ

推帛として金仏和ふうみゐうり乗うをうゐ
御ぐ〳〵出彩きとうされまぐくトゐ実面ふ
那うれれで白ク義ゐ五まぐき毒信ゐなく情
し路待として乗うしが我〳〵ぐんの中出業ふ
しのうくうらハ仰ゐもかゐ五毒毒ゐ〳〵ヤ
ぐ〳〵出大事ゐるおうさゐのお多のう〳〵線組の
るハ叶ふずとゐせうく銀十帛ぐんを戦むる
うぐのるハ出不管ゐし〳〵とのうまうト呂今ろ

やうふに世〳〵まうせ〳〵あり其人者をもさとり
のひとりをかてのねの世ゆくまでひていのべきこと
でも是朝廷せび他ことから出人者を給ひやす
やうあれども扨のうるいとでいまんもむれくう〳〵
くれば兵一下通り出事ねやまでなり先年新
八をもつて出相続のうややまゝわるら出初八
出なるふ潮ひ又かうさゆ出商事ゆふ出相
続もあるされ雖きよう〳〵それも是もあやうともふ

[illegible]

[illegible]〳〵ふぶとりをを分てやせ〳〵ばふ〳〵て出人
事まるる家のうへゆ出家家へ扨の世まきれ〳〵
よ〳〵家初のお云ばまさへ齟齬も往りりやや
町家への出縁組を嫌ひすのあんゆもうまるぶ
銭十弟家へ武士とのゝて出縁組をる扨さんと
存ぜるまりそれへ本何ふと出ふ番もあるべきぶ
今の時世へ金きへあれば貧生のうり兵今りも
穢食の出家人とまゝてあとうぶのを出世へや

ぐ〜又銀十帛ゝ程ゝ後ゝらの町人とゆでの
あくさる比蒲屋にて暮きと〜たる人の母子思
あり〜ぐ子細あつて芸者のゝ〜よう〜生ふ通の表
子ふ業ゝひ今日まで表育せ〜ゆのゝ人ゝつも
はゝるゝ年ゝ日ゝ躰ゆる密〜原せ〜るなれ
ぐも実も嘆ゝゆる一人のせぐれとふ義ゆ者ある銀
十帛ぐゆのゝくゝ殺〜ふする者〜さふ義や町
家を取ひすふゝト比弟〜ゆ〜せ〜ゆ後ゝらの

町人ふあらぐるゝを比新くまゆ家まゝ比ゝ
比性〜ゆあゝ比業まで比外〜も生ねるゝを
舎ゝのふ後さふ比走しも義理あるゆくふゝ
家ゝ渡ぐ物ゆを嘆させく嘆ゆ明ての
お性〜名ふぐお者ふさゝられお兵今ゆゆせ〜
通ゝ町人ゆの比ふ明人あゝくまくも銀子命
る武士ふゝ立銀組をも銀ゆ〜新まゝす
くゝゝ比ふ名をも銀ゆ〜ゆ〜ゆ子細を明〜

ものはしト涙ながらに物の義理と情
と悲哀の肇めより親の意想をそ
あげきのありさまを雷坊おとろめろとの切
ある老の仏性をさろうて枝を綾りくの結縁
鈴子弟の此度悲びゝおとろゞ来りしト物の
悲びろ悲びどゝ和ものゝどの結る地ものゝの場たひと
独り仏をそろうあゝ出るのからず居るゞ和と
角悲ゝさまろゝさふ青会ふあるうとも物

まゝ〳〵さ悲哀の次の君へ悲びあるて始後
のあるまをを物よるも是ハトハウト驚きうゝ思ひ
がけおれ我身のゝ佛ハ此家の妻子あるうと
ものゝ一ゝ不義理ある親大恩矣し是ので
のゝ情けを少余りたるゝ意悲と毀る泪ふ
いろ変ゝ又悲哀のうきねりひ自ふつまるを
居らゝ〳〵あ我もあるを変悲る雷坊
まゝ〳〵てゞくるいある程さ死生ゝ新八を泣く

縁後のゝ母のせちされ〜おらら後者様ハ
ぬは接拶致せ〜ゆへ町家〜えん組成
嫁ゝてのゝめやゝ婚姻ハ成とゝ方
あゝさゝあぐら今〜さゝうの子綱ら〜きゝるゝ
夏あく甘ゝ〜如き浪人の姪者食のゝめゝ
手ぜんゝの者ふゝゝゝ者むれあれども大臣あれハ
ゝふまゝゝせずされば成て般初あくぬ〜たゝゝ般
嫁めゝゝ大臣ある者とゝゝされずいゝゝく

かと附て形ゝゝ甘〜紙それゝ是ゝ者〜からゝ
ずゝて者度のゝゝゝ入をゝゝ変生てゝゝゝ
あゝのゝゝ必今ハ祥まゝゝ者ゝあく是非
ゝゝゝ大臣ゝあゝゝゝ者初まゝ甘〜
弱きゝゝ黙黙雷〜と疑ひゝゝゝ形ゝゝ
又町家必ゝ嫁ひてゝ形ゝゝひたまひて
ハ今命雑千弟ゝの孫ゝらの町人でゝゝゝゝ
新〜せゝゝん〜ゝゝその素性までゝ明ての

山物語り実ふ余気あく存ずるの余り山雀
がひの会をも嫌さえ乃大事の子細をもあり
明て山〳〵やべ〳〵是といめもまつさく老父の
山人庭を感ずるの余りあり二直まで山ふ見よ
さう包こ涙〳〵ものを今歩明て山〳〵ものを
その函数ふ我も又ほ〳〵まず山〳〵ヤスぐ〳〵
さうあがら金〳〵も仮初あくね一大事ことふ
山ふ見もさる山五葉ふ山実父もろう〳〵世

成りもの山数りのるあれがいづ見の山五葉なる
う先られをうれをうれまりたり〳〵いくべ白の蒔ものく
いくさあさ〳〵のるもあるべきあり今更仮三をち
〳〵〳〵カスべき弟子が実父といめ芝浦の
山五葉ふ山ふ家の山之藩中ふて一学さ風ト中
せ〳〵山ふあきうと浦ようう番外もハテとれハトムの
うもふ不雷てのしや敬の石線ふそいあらざる
イヤ〳〵彼梅木香門八十余年弘来考結ふ

勤仕よし学文もおびられが縁あつて若年ながらもあるゆゑ
然らばと安堵して傍々ふしぎの奇縁なるぞ
あるじの娘此おとみが親といふは当家の重役
生駒一学と申者なりしが細あつて主人の家
同家中楠木香門といふものゝ為に殺害されて家
断絶に相なりしが是非なく十歳にして浪宅へ
引とり貧窮に暮しけるうちにも母に卒去を
付まで引取るをそれのゝ頼みゆへ女子どもある 居住 出

生駒の大事孝心厚き様子に深く感心ふ
ずまりせつなく力を添る時節は仇を討て
此家も本意を遂させんと此る内閑く翔郷の
世の中諸方をも尋させ兵営敵方の外舎念者説
打つらされがあつく縁組のる事相のひも寄ず
それゆへ田郎りかせしありト姑詳を婦めく。自ら
我も何こともなくそろふんも驚きつ イヤ待るべく
当家の店家中にて一学どのと相娶せらるゝ

[illegible]
死出の一号さまの世をすまされまうしやと思ふ
おとうとかさまらうしいふも吾佛が親の名
ありし親の人もあつてあつうまうまる死父が宮殿
の御きさに抱きふもされたりと涙を袖をぬぐう
うれば白々髮も時々涙ふむせまぐら佛に一号
さま人よふ親うてお果あうたうと理うそ
絶てお人もうさられずいうぐとはりひ号せふ
さもいとうきさに宮殿をとげのひ

[illegible]

[illegible]
塔ゝやさんゝ悔紀十郎とそ一号さまの
出想ひてあとうぐの為血を分られさ
東ど
兄ち さまでどざうます[illegible]のトいふふうふ
母の人も喜ずトりゝいうゝとふ書の仏次の
母ふ母の所さし紀十郎も大きふ驚きやう
さまれば吾実父いゝ人ふ無うそそ
のひゝう是いまうと思ゝさ思ゝさ

出られず身を潔め祓をぎとかくべく
涙をとゞめかねる所さる白ゝ紙を引て去る兵
衛も奇縁のこゝろ〳〵とてさるべき籠きの兵
理りなり和をいとゞ利がゆへくねとやらまゝ
ごく実ふ和かゝき昔がたり〳〵ゆへてたゞ
ゝるものいわゆる家の茶屋狂
勉ゝのあて一学さるの新古源をぎくん
さるのゝ又立ふあぐろう還俗して陸奥の国へ

中小姓はまでゝ立身せゝ西異のわどもゝ
貴ず色い思案の外とゝ勉めの女中を
蜜通ゝゝゝひゆ人間の関誠て何漕が浦ゝ
門西の殿ゝまゝれば浮名も立て同行元乃
年ゝも入り西家の接を破るふ色きゝのゝ人
ゝもふすでふ仕是ゝゝのゝ必を浦ゝたゝ
さゝゝその時いゝ夫家老級西勉ゝゝゝ
ゝ人ふ等殺せゝゝゝ天ゆゝゝ殺ゝゝ

元禄の比迄沙汰あらざる矣を早速の義に
相立めば切腹致すまでなりと云〻
あらざるを云上拵べさられ〻べ比上に成
方無さるの切腹とまで云ひ〻と中立〻
実義あらんと比疑ひ晴れ命たすうと
今日まで在存〻まうさく法さるの比義
悲ひ情け一ッなりその後お人減〻と兵衛ちく
比所のうり者ものようぶるあるれがいぶぜん

と南蛮の打うち又法さるさる代家の比
金子命ト比鎖仏ゆへ比ロへ比ちされ此るを換る
代ちさる朋輩ちのきその中ある金人あるざる
比ロ人の形〻ゆへ〻ト〻れ人の拵ひ付も結構
も又ちさ云大ちのと精出して法ともるるるぎる
縁のまうり今せ代家の娘といるへ比五義を並
〻附蜜通せ〻女中あれば宮あて法さざるん
さるるれ比ニもかも比存〻ゆて偽れ比ロへもされ

しろがあり雑きに性けくもくも雑
きらひ雑きあぶねに事悪と蓋あぐらも
伏雑き娘も宿りのおらうと知つくも
あしんのひまくを悔うまふね振のやまそふん
悔しとおのへ恐雑すうの因果に土焼本抗
あひ火もつき安くしひ思ひ蓋のいつとあく
穂ふ形られて親方の耳あもへう又悪ゆふ
身の迫ることおのくどあらね湯〜雑いうぶせんと

百一五

苦ふ悪しぶ親方も一人娘の可愛さふ我
身のふ者い形名せず娘のふけひ〜男
妻へ婿ふ宮めんトねまでぬむあよくも
まんまト氏家のむとこのうふの作ふ者をちち
雑ものく悪父もる雑且家名を継で一郎の
ちとあり仏の二ツふ自由ものくますもとふ
徳をたうさ女の氏蓋ゆくと汗時悪るくまま
あるれば仏乗氏氏墨あうを殺〜家とんふ

多
勢にうつすすれうら十八年以前のころ一ぢ
さぬいまぐ部屋住のそのまられしご后ろ
女中ふをとをなすのひいつしろ懐抱のせんろ
あく神でゆもも高きのるものゆきもぐ
さぬふさんがかうとものらと第とやせぬじかくや
せぬじと抱のひまるしるふうちちや結月もちろ
なすびいよしし釈迦さぬのくまくゆ沢なしと
頭ふふ高窓しものよしゆのとしとしくるぐ

后十六

日頃の大恩を勢ぼる時命と抱のひあと寿
うふその女中を我方へ引くく安産させるべ
一ぢまさぬの巳前ろ方も体まり帰ちちうさぬの
お耳くものぐぼ巳家中くもゆのくぼ美ぐりして
双方の巳ゐと女ぢくるいさのを清ろ我ぞん
会を寄ふふ一ぢまさぬゆうられば作ろるくよろ
とびのひまようその女中を勢の高手看高
のゐる高ぐのうちち宿くきらす体ふたんん

産婦に対して、我ふび世話してくれよとのお頼みなり
のちとも出産おくうとかの抱してそのゆへ[illegible]たん
生産婦の胎盤[illegible]命ある兵砂金ある須の
たゆへその女中の身のうへ七夜のうちに血の乳
上りそうなるく命絶しが出生のうへ産婦ゆへ
はくの産びと一学さるゆへいさみを出新せ中
たれば無ごるゆへ是非もなく親のうへ[illegible]
後ふとう斗らんと又生産のうへ引そて養育

のあさうふど親人のゆへ怪うあんびらるへ
あうとも男ふ産うてあげさくるへも養
育とのこるゆへ女ざうあるあうと又の産うへ
うれびさすぐ女子の産も弱く可哀や傷る亟
のあうあるみどう子を男ふ産うあび他人の中間
我とあうそうあるあり乳さとる紀ねど春ほど
いうふもらとうきるのあれび産ひ吾仕ふるとと
とあるへゆくく養育あうせんようも産婦の道

武刀子孤ふ生れ落ようひ〳〵くく
育てるべ孫を貸ぬだろうまて実のこゝを門
若ものうそくふ母ものゝ〳〵くあらうれそ
武子ものぬ人ふ注目吾倣を実の親と見れ
るの光宣ものう倣ことぞ業ひまく乳母を益
ものとあてまあひ育てさ〳〵さうあぐふ折角
母様〳〵ものぬ人の後ふ戻されて西絵も通
よりや又うう戻されずとも父母が出へるひて

ひ先サふ覇されて名業合ものもひてもるひ
ふ先ものふれが先さ合まて一生ふ通
ふものゝふ人のふべうらへも背打て表育も
せんト金ぎなき邪ひふ基〳〵も義と扱のひす
必さうそく一号さ為〳〵その親きとか上ふ
倣が徒里ふさくきらうんとまで扱のひ出〳〵る
あれが尤ものゝそくまるのべそのるの仕合せうの
うんのようとびるゝ〳〵ふる門系の乗へ通二生

ぶ父母のせんまし给ひ分かちも養育深くの恩を
ひさしくよく重き乳母を並まねがたの
しまふ月日星霜をしてあげる
十八年ねそ侍らそまる侍に通かして勤むるにあまり
さびしかまず折るなかせしありてまくらや丁寧に
年の気源を左右さまでの上に一字
さある左様を様を継ぎのひてより打ちふるさん
従ひありされしがその後に絶えて左右もなし

右ノ十九

まふて深く定めて古館のほまあく出勉め程べされし
る事と相かわる今の世ゆしをさかのうり疑ふき
へつらう稚葉の法家の朝全りのるすに実の母し
承も相ちられまの世ね兎角ようまま見へらきを世のみ
其しが妻も支へる年むなしく要をを去て我を
種の活あがくきるのさを手をねかし浮世下へ
いふあるべしさりながら実ふふしぎの縁にて
古大夫の子細もうけあるうしくおそ下れ

けさぶの
ぶ〜〜のる銭子弟を新〜ねるの
乃〜墓さんトせ〜ゆ〜墨を
ゑをゑゑく〜引金毛のふあるぐ〜氏子綱を銭子ふ
ゑいひ他のまぶ墨墓の毒ひもさらりとれんて
高手なか銭せんるゆ安業のうちのう今まで色を
〜家姓ゑれとも実父一号さゑの氏宮朔の
ゑまもまぶ中ゆの毛とも〜歌きを対セヤス
ゑ〜町人ぐらもおのひ高ず歌ぶの方人を

ゑ
ゑのゑ〜偏ゑおゑゑぶの孝心を天道懐ゑ
ゑのらゑ、戻汗ゑふ押撫ひる俳うふのぶ
ゑび爾妙ゑ文おゑゑゑふ測の奇線ふ紡俳と
あきれ果ゑるぶゑゑあり

○作者鼻山人のいゑく白ゑ銭ぶ妻ゑ〜〜〜
白まゑしといゑゑ後配偶の女ぶ〜ゑゑ〜ゑ
妻ハ流ゑゑのいぜん已人の報ゑハ〜ゑ〜ども
白ゑ銭ゑゑを白他さゑふゑ〜ぶ

江戸花誌 後編一終

后フ世二